

# 北の黄色い小人

## 目次

### 北の黄色い小人

ジョヨボヨの予言.....	2
北凶方位.....	5
期待される民族解放者.....	9
ニッポン人が来た.....	11
オプティミスト.....	17
トコジュパン.....	22
月明のジャワ海に没す.....	27

## 「北の黄色い小人(1)」(2022年12月22日)

ジャワ島の民衆の間であまねく知られている予言がある。西暦1135～1159年にカディリ王国の王であった Jayabhaya が予言したものとされており、総数で二百数十項目に及ぶその予言をジョヨボヨ王が書き遺したと信じている人が一部にいるものの、現存するジョヨボヨ王の自筆もしくは監修した文書はどこにも見つからない。特にその時代の宮廷文学者ンプセダとンプパヌルが書いた作品はジョヨボヨ王の著作について何ひとつ触れていないため、ジョヨボヨ王をその予言者だと確定できる材料が何もないのである。

人口に膾炙しているジョヨボヨ王の予言は西暦1618年にギリクダトンのイスラム支配者スナンプラペンの著したムササル(ムササラ)の書が出所だということでインドネシア史学界は合意している。ムササル(ムササラ)の書にジョヨボヨ王が予言した内容として書かれているためだ。文献学的に見るなら、それがもっとも古い文書ということになる。

西暦1741～1743年にカディラグ領主のパゲランワジル1世が「ジョヨボヨ王の予言」を意味する Jangka Jayabaya というタイトルの書を著した。このパゲランワジル1世もカルタスラ王宮の宮廷文学者のひとりであり、文学者たちを統率する長の職に就いていた。かれはマタラムイスラム王国がスラカルタ王国に移行する時期に王宮の中心にいた人物だ。代々のジャワの王宮文学者たちもその著作の中にジョヨボヨ王の予言をさまざまに変形させて使っていたから、表現のバリエーションは避けようもなく起こった。予言内容の逐語的な定型化の正反対が長い期間にわたって行われたことになる。

ジャワの王宮がジョヨボヨ王の予言に深い関心を抱いていたわけだから、ジャワ民衆の信じているジョヨボヨ王の予言がより豊かになっていったのも当然だろう。われわれがここで注意しておくべきことは、ジャワの民衆の間で巷説として流布している予言の内容が何かの書物を読んでかれらの認識の中に形成されたものではなさそうだ、ということなのだ。つまり聞き伝えで広まったその内容について、その原典を求めても独り相撲に終わる種類のものごとのひとつではないかということなのである。

ジョヨボヨの予言の中に、ジャワ島が後にたどった西洋人の支配と植民地化に関するものがある。ジャワ島は長期間にわたって白人の支配下に落ち、そのあとに北の黄色い小人がやってきて白人の非道な支配を終わらせ、小人も支配を短期間に終わらせて去って行き、その後はジャワ人のジャワ島になる、という内容だ。

広大なヌサントラの地を植民地にして祖国オランダに大きい繁栄をもたらしたオランダの国家英雄であるヤン・ピーテルスゾーン・クーンもジョヨボヨ王の予言を聞き知ってVOC重役会への報告書に次のように書いたそうだ。

「この地の諸国には昔から予言が語り伝えられていた。その予言はこう述べている。遠い土地から異民族がやってくる。肌の色が白く、全身を衣服で覆い、手も足も覆っている。目は猫の目のようで、鼻が大きい。豚肉を好んで食べる。その異民族がこの土地を支配する。」

本来商業利益の追求を目的にして作られたVOCという会社連合がその利益を最大にするために外国の土地や住民を支配するという構想を抱いて会社を国家よりも上位に位置付けたクーンは、自分の考えを重役会に説き続けていた。

それまで、会社はアンボンに本拠を置いてスパイスを集めることに専心していたのだから、重役会がどういう方針で会社経営を考えていたのかはその事実が示している通りだったと思われる。征服・占領・支配ということは行われたが、すべてが袋や樽に入ったスパイスとして結実すればそれでよいというのが当時の会社内にあった方針だっただろう。

クーンはそんな重役たちよりもはるかに貪欲だった。会社の利益の源泉をスパイス一本槍にしてはならない。あらゆる手駒を使って会社の利益を作り出すためには、手駒は手からこぼれるほどあるほうが良いに決まっている。[ 続く ]

## 「北の黄色い小人(2)」(2022年12月23日)

征服・占領・支配を行って隷属させた土地と住民を使って得られるものを手に入れるのである。スパイスの産地ではそれがスパイスになるだろうし、コショウの産地では、木材の産地では、布や軽工業の産地では、それぞれ違ったものが得られて会社の富を増やすのである。

そのクーンの構想をジャワの民衆はずっと昔から予言として知っていた。クーンは驚くと共に、自分の船に順風を得た思いがしたにちがいない。自分がこれからすることは、その予言の実現なのだ。これは必ず成功するはずだ。自分たちがそうなることをジャワ人自身が予言しているのだから。

クーンが考えていた土地と住民の支配はジャワにあった予言と一致していたが、この予言に付随しているはずの黄色い小人の話はそのときクーンの耳に入ったのだろうか？たとえかれが白人支配の結末を耳にしたとしても、そんなことを本社重役会に知らせる必要はないと判断した可能性が高いようにわたしには思われる。クーン自身の性格からしても容易に推察できることだし、そんなネガティブな印象を与える話を重役会に知らせたところで、クーン反対派の重役が政争の道具に利用するだけだろう。自分の構想に水をかけるかもしれない要素は報告しないでおくに限る。

要するにクーンは重役会に対して、東インドの土地と住民に対する統治支配を会社が行うことをアピールした。最終的にVOC重役会はそれに賛同してクーンが本拠地をアンボンからバタヴィアに移すことを承認した。

われわれオランダ人がその予言の白い異民族なのであり、この構想は原住民がすでに予想していたものだ。VOCはそれを現実のものにするだけだ。隷属させられる原住民は自らの運命を予言の形で知っていたのだから、この構想の成功は疑いない。クーンはジョヨボヨの予言をも最大の効果を狙って利用したはずだ。

今インターネットを探ると、ジャワ島をめぐる白人と黄人についての予言の文句は次のように表現されて

いる。

- \* 白人を追い払うために黄人がジャワにやってくる。
- \* 黄色い小人が白人の非道な支配からジャワを解放するためにやってくる。
- \* 黄色い人間が白い人間の非道からインドネシアを解放するためにやってくる時期がある。
- \* 白人の男たちがやってきてジャワを長期間占領する。北から黄人がやってきて白人の支配を終わらせる。  
黄人はジャグンが生育するくらいの期間だけジャワを占領する。
- \* 北から黄色いひとびとがやってくる。身体は大きくないが小人というほどでもない。黄色いひとびとはジャワの地を占領するが、それはジャグンの生育するくらいの期間だ。
- \* ジャワ島は白人に支配されてから、肌がジャグンのように黄色く、小さい細目の小人がやってくる。黄色い小人の支配は長くない。その肌の色のようなジャグンの生育する期間だけだ。
- \* 人間を離れた場所から殺せる杖を持った蒼白い肌の者がやってくる。そのあと、黄色い肌の者がやってくる。かれらはこの地を支配しようとする。そのために多くの生命と財産が失われる。
- \* semut ireng anak-anak sapi(牛の子供の黒いアリ)

黒いアリに例えられる勤勉な白人がやってきて、又サンタラの富を収奪し、牛に例えられた本国を富ませる。牛と言われると、われわれはポルトガルよりもオランダのイメージをより強く感じるだろう。

- \* kejajah saumur jagung karo wong cebol kepalang

身体の小さい小人によってジャグンの生育するほどの短期間だけ支配される

[ 続く ]

## 「北の黄色い小人(3)」(2022年12月26日)

昔はほとんどだれも気にしないで jagung という言葉を現代インドネシア語のトウモロコシに翻訳していたが、それは史実としておかしいという意見が出てきた。トウモロコシはアメリカ大陸原産であり、新世界の発見によって15世紀にはじめてヨーロッパ人が旧世界に持ち込んできたものであるから、12世紀に生きたジャワ島のジョヨボヨ王がトウモロコシを知っていたはずがない、というものだ。実際に、ヌサンタラにトウモロコシが伝来したのは16世紀のポルトガル人によるというのがインドネシアの学术界での定説になっている。

史実から見ておかしいというその意見は、ジョヨボヨ王が予言を口にしたときにジャグンという言葉述べたことが前提にされている。しかし上で述べた、ジョヨボヨ王の予言の源泉が1618年のムササルの書とされているという考察に従うなら、その前提自体が的外れだということになるかもしれない。スナンプラペンはトウモロコシを知っていたと考える方が自然ではないだろうか。すると、ジョヨボヨ王の予言だと言いながらスナンプラペンは創作したものではないのかという疑惑が浮上してくる。これは答えの得られない疑問だ。

視点を変えてみよう。トウモロコシの渡来以前にジャワ人の語彙の中に jagung が存在していなかったかどうか。デニス・ロンバール教授は古ジャワ語の中にジャグンがあったと書いている。その説によれば、ジャワ人は昔から jawa agung を短縮して jagung と呼んでいたのであり、その語は更にムラユ語の中に摂取された。このジャワアグンというのは一体何なのか？jawa とは現代インドネシア語の jewawut のことで、大型のジュワウツがジャグンと呼ばれていたと解説されている。このジュワウツあるいはジャワウツとは日本語の粟を指している。

ちなみにズツミュルダール編纂の古ジャワ語辞典にもデニス・ロンバール教授の説と同じことが記されており、この jagung は jabung という同義の音変化語を持っていることが述べられている。粟の生育期間も70日程度であるから、トウモロコシと似たようなものになっている。オランダ人の350年というヌサンタラ寄生期間に較べたら、日本人の3年半という寄生期間の短さを表現するための比喩に使われたジャグンが粟であろうがトウモロコシであろうが、本質論的には何の違もないと言えそうだ。

黄色い小人が北からやってくるという話は、白人がもっと北からやってきたのが事実であることを知っているわれわれの耳には奇妙に響く。白人は確かに大西洋の北の端からアフリカ南端まで下って来たが、オランダ人はそこからインド洋の中央部を突破してヌサンタラにやってきたから、ヌサンタラのひとつの目には西から来たように見えたはずだ。

日本にやってくるときには赤道近辺に設けた本拠地から北上して来たから、日本人は白人を南蛮人と呼んだ。大航海時代以降にアジアに設けられた白人の拠点が赤道近辺に集中したのが日本人の誤解の原因だったということだろう。白人が北の果てからやってきていたことをアジア人はいつごろ認識したのだろうか？

ジャワ人は北に最大の注意を払わねばならないという認識を昔から持っていた。北からやって来るものがジャワに大きな変化をもたらすと考えられてきた。常に北を注意し、警戒せよ。良いものも北からやってくるが、敵や大きい災難も北からジャワにやってくるのだ。歴史を見るなら、元の軍勢も北からやってきたし、日本軍も北からやってきた。

確かにジャワ島から見て南の土地に住んでいたのはアボリジニだけであり、アボリジニは侵略戦争などしない。ジャワ島が北の大陸文明から見たら南西のどん詰まりにあるという地理的位置から言えば、南から大きな変化がジャワ島に襲い掛かってくることは可能性がたいへん薄く、また歴史の中でもそんな実例は起こらなかったように思われる。[ 続く ]

## 「北の黄色い小人(4)」(2022年12月27日)

北はジャワ人にとって凶方位なのである。歴代のジャワの王国が発展拡張を行うとき、かれらはいつも北に向かった。そしてジャワの勢いが弱まったときは、北からの逆流がジャワを目指して襲ってきた。ジャワが宿命的に背負わねばならない原理がそれだったにちがいない。

ジャワ人の家屋は南北方向を軸にして建てられるのが普通だ。東西を軸にした場合は日射が強すぎて快適でなくなるという自然現象がその根源だそうで、自ずと南北が方位として強い意味を持つようになった。方位に関する意味付けは元々ヒンドゥ文化のもたらしたものになっていたが、その後も自然現象や歴史内の諸事件が色付けを与えたようだ。

ジャワ人が家を建てるときに口にする昔からの言い伝えには、台所の炉や樋は口が北に向くように作ってはならないとか、しゃがんだときに顔が北に向くような形で廁を作ってはならないといったものがある。

ともあれ、北の黄色い小人がやってくるという言い回しには、それが凶事であるというニュアンスが込められていたのかもしれない。北から来たと思っていたものの本当は北からやってきてジャワ島を過酷な支配の下に落とし入れた白人を黄人がやってきてジャワから追い払ったからと言って、それをジャワにとっての善事だと思っはいけないという意味を込めて、あえて「北の黄人」と表現したのだろうか？

その黄人とはいったい何者なのか？歴史が既に予言の内容を現実を示したあとの時代に生きているわれわれには分かり切っている話であるのだが、1942年3月1日のジャワ島北海岸部で起こったできごとを想像することもできなかった時代のひとびとはさまざまな空想をそこに重ねたことだろう。

オランダ人がこの予言の白人の役に自ら就いて予言を演じようとした可能性は上で触れた。しかし日本人の間に「北の黄人」の役を演じようとする意識は爪の垢ほどもなかったにちがいない。もちろん、ジョヨボヨの予言自体を知らなかったらから、「北の黄人」の行動を執り始めたときにそれを予言に結び付けようがなかったのは言うまでもないことだ。ただ、1941年12月に始めたこの戦争が短期間で終わるという読みを入れた人物は日本にたくさんいたそうだから、その点に関して言うならジョヨボヨの予言もそれを見通していたと言えるかもしれない。

ところが、その「北の黄人」は日本人のことなのだ、ということが20世紀に入ってからインドネシア人の間でさやかれるようになった。予言の内容を予言するような話だが、第一次世界大戦が終わってから、国際情勢を読むのに聡いひとびとは将来世界がどのようになっていくのかということ在地政学的に推測することができた。



明治維新以後アジアに一大勢力を築いてきた大日本帝国が1930年代に南進論を活発化させたことによって、将来何が起こりそうかということがインドネシア人の目にも明らかになりはじめた。大日本帝国軍がジャワ島を占領すれば、白人は追い払われる。日本人は肌が黄色で小柄だ。おお、これがジョヨボヨの予言だったのだ。

20世紀に入ってオランダ本国が東インド植民地に対する基本方針を改めた。倫理政策と呼ばれるものだ。ヨーロッパレベルの教育をプリブミに与えることが政策のひとつになり、優秀なプリブミたちはさまざまな学問知識を身に着けた。そして、白人による植民地支配が非人道的であり、各民族は自由と独立を基盤に置いて民族生活を行うのがまともなありかたであるという、ヨーロッパ文明において基本的な学問知識も一般化した。

それまで植民地主義者が東インドで行ってきた愚民政策をひっくり返すようなことをオランダ本国が始めたようなものだ。植民地統治行政の中で、民族主義者・独立運動家たちへの締め付けが厳しくなった。それが民族主義者・独立運動家の反オランダ運動を先鋭化させることになる。[ 続く ]

## 「北の黄色い小人(5)」(2022年12月28日)

インドネシアの知識人たちは民衆への民族独立の教化と宣伝を続けてきたが、その中にジョヨボヨ王の予言も組み込まれた。1930年代には、オランダの植民地支配を終わらせる北の黄色い小人は日本人だという説が一般的になり、インドネシア民族の解放者となるであろう日本と日本人をより深く知ろうとする動きが一部で起こり始める。

たとえば民族主義運動組織ブディウトモも日本への傾斜を起こした。ブディウトモは組織の費用で日本に留学生を派遣し、その初代留学生サムシ・サストロウィダグドは日本と蘭領東インドの経済関係を卒業論文にした。ブディウトモ会長のドクトルストモも1937年に日本を訪問している。

日本を訪問したことはなかったものの、戦前のインドネシア民族運動の巨魁のひとりだった E.F.E. Douwes Dekker がバンドンに開いた Ksatriyan Institut では日本語が教えられるようになった。この E.F.E.ダウウエス・デッカー(現代オランダ語発音)はマックス・ハフェラールの著者ムルタウリの本名とそっくりだが、かれはムルタウリであるエドゥアルト・ダウエス・デッケルの甥にあたる。

クサトリアン学院が日本語を教えたのは、優秀な生徒を日本に留学させてインドネシア独立の機会を求め一助にしようとするダウウエス・デッカーの構想に発したものであったそうだ。

1930年代後半にはインドネシアの諸階層で日本旅行が活発化し、オランダの傘の下にあったプリブミ政財界の中に日本との関係構築を図る者が出るようになった。政党主や政界中枢のひとつと、財界の大物、おまけに国民議会メンバーまでが日本詣でを行うようになったのだから植民地政庁は大いに神経を逆なでされたにちがいない。

インドネシアの一般民衆にとって、日本という国と民族はそれまでも決してなじみのないものではなかった。これはアジア全域で言えることだろうが、日露戦争における日本の勝利が白人との近代戦争でアジア人が白人を降した前代未聞の快挙とされ、日本という名称を不朽のものにしてしまった。アジア人は白人に勝てないという劣等意識が崩壊し、日本を英雄視する心理がアジアを覆った。日本人と身近に接したことも、あるいは見たことすらないひとつとでさえも、日本という言葉に好印象を抱いた。すべてが観念の中で起こったことであり、インドネシアでもそれは同じだった。つまり日本という名前が独り歩きしていた時期がそれだったのである。

その好印象は日本人の優秀さという解説がバックアップした。明治維新後の半世紀も経ないうちに、日本は重工業化を達成し、強い軍隊を持ち、ヨーロッパ製の武器兵器に劣らないものを自国生産するようになり、その結果が日露戦争の勝利となって輝いたという成功譚がアジア諸国の知識人に更なる憧れを抱かせることになったのだ。ヨーロッパ諸国さえもが日本は列強のひとつだと公然と語るようになったのだから、好印象ははちきれんばかりに膨れ上がった。

インドネシアの民衆もそんな話を認識していた。しかし好印象が観念の中で膨れ上がる一方、現実の日本人というもののとの接触はあまりたくさん起こらなかった。かろうじて起こったのは、町々にできたトコジュパンをはじめとする日本人経営の商店における日本人店主や店員との接触くらいだったようだ。[ 続く ]

## 「北の黄色い小人(6)」(2022年12月29日)

1930年代に入ってから、廉価な日本製雑貨品がインドネシアでの流通量を増やし始めた。それを販売するのがトコジュパンで、店内の明るい雰囲気、元気のよい日本人店員の接客態度、プリブミに対しても敬意と親しさを示してくるといった特徴がプリブミの間で好評を得た。それがはちきれんばかりの好印象を空中に浮揚させた。日本人はインドネシア人の想像の中でプロタゴニストに担ぎ上げられたようだ。トコジュパンについては、

「トコジュパン(前)」(2019年11月18日)<sup>1</sup>

[http://indojoho.ciao.jp/2019/1118\\_1.htm](http://indojoho.ciao.jp/2019/1118_1.htm)

「トコジュパン(後)」(2019年11月19日)

[http://indojoho.ciao.jp/2019/1119\\_1.htm](http://indojoho.ciao.jp/2019/1119_1.htm)

「留学史(28)」(2022年11月10日)

[http://indojoho.ciao.jp/2022/1110\\_1.htm](http://indojoho.ciao.jp/2022/1110_1.htm)

「留学史(29)」(2022年11月11日)

[http://indojoho.ciao.jp/2022/1111\\_1.htm](http://indojoho.ciao.jp/2022/1111_1.htm)

をご参照ください。

---

<sup>1</sup> 「トコジュパン(前)(後)」は巻末に添付。

ニッポン人が来た

そこへもってきて、ジョヨボヨの予言の黄人がその日本人なのだということが噂されるようになった。憧れのアジアの光である日本がインドネシア民族の解放者になるのトコジュパンだという噂が上乗せされたのだから、日本軍がジャワ島に上陸したとき、民衆はこれこそが民族を解放する正義の王 Ratu Adil の到来と考えて日本兵の背中に神威の光輪を見出したのかもしれない。

インドネシアの民衆がバンテンからバタヴィアに向かって進軍する日本軍を歓呼の声で迎え、中には土下座して拝跪する者すらいたという話がしばしば語られているのだが、それは日本人という民族に対する明晰な意識で行われたものだったのか、それとも現実の日本兵の姿にオーバーラップさせた、神格化された民族救世主の到来に向けられたものだったのか？ 当のインドネシア民衆自身にもその区別はできなかったかもしれない。

ラトゥアディルもジョヨボヨ王の予言が源泉だ。その予言によれば、ラトゥアディルとは苦難や危難に襲われたジャワにやってきてジャワを困窮から救出する救世主とされており、satria piningit あるいは Herucokro と呼ばれたりする。特定の姿を持たず、実在する人間を使って力学的にものごとを成就させると考えられているので、つまりはできごとそのものがラトゥアディルの行為だということになる。

ただし現実には、自分がラトゥアディルあるいはヘルチョコクロだと名乗って民衆の心と助力を得ようとした叛乱首謀者はたくさんいた。ラトゥアディルは化身しないという説もなかったようだから、民衆はそれを受け入れたにちがいない。なにしろ事の本質が白人支配者への武力蜂起なのだから、それに盾突くことは筋が通らないという考えが先に立ったはずだ。長い人類史の中で、自分は神の化身だと思った人間と、自分が神そのものだと思った人間はどちらが多かったのだろうか。

日本軍のジャワ島上陸はラトゥアディルの作ったシナリオだったのであり、ジャワ島はこれで白人支配から解放されるのだという感激の現場に立ち会った民衆が救世主の出現を感じて集団ヒステリーに陥った可能性がないとは言えないようにも思われる。

インドネシア民衆の目に映った解放者は、小柄でチビで、目は小さく細く、たいていが眼鏡をかけ、口を開くと金やプラチナの歯冠が光り、ヘルメットの後ろにハンカチ状の白布を垂らし、歩くときは身体が右に左に

揺れて歩調に合わせて頭が前後し、着ている軍服のデザインはたいしてカッコよさを感じさせるものでなく、たいていの人間が想像するプロタゴニスト<sup>2</sup>の印象とオーバーラップするものではなかった。

かれらが実際に目にしたことのあるヨーロッパ人の文民や軍人、あるいは身体の比較的いかついオランダ植民地軍プリブミ兵士や軍人たちの体格や風采と見栄えの良い軍服姿、それと見比べて、この北からやってきたあまり風采の上がらない黄色い小人たちがあっさり植民地軍を一掃し、反対に植民地軍やオランダ人が小人を恐れて逃げ出していった姿を目の当たりにして、たくさんのプリブミが信じられない思いを抱いた。だが、それこそがラトゥアディルのなせる業ではなかったのか？[ 続く ]

## 「北の黄色い小人(7)」(2022年12月30日)

1942年2月に日本軍がシンガポールを陥落させて名前を昭南島に代えたとき、東インド植民地軍は戦々恐々たる雰囲気陥った。蘭領東インド北部は既に日本軍の侵攻を受けて各地で続々と降伏が行われていたさ中であり、ジャワ島に王手をかけてくるのは時間の問題とだれもが思っていた。

そのころ、スラバヤのウジュン海軍基地でロジスティクス部門の下働きをしていた18歳のプリブミ青年は、オランダ軍艦が入港すると乗組員が頻繁に物資調達にやってくるので自然と親しくなり、乗組員たちも強い不安の中にいることを肌感じて知っていた。日本軍に勝てるとは最初から思っていないような雰囲気に包まれていたようだ。

2月末になってスラバヤから近いジャワ島北部海域で海戦が起こり、日本海軍の圧倒的強さを地元民が目撃することになった。インドネシア人の目から見たこの海戦の詳細は幣作「月明のジャワ海に没す」<sup>3</sup><<http://indojocho.ciao.jp/koreg/libjawac.html>>をご参照ください。

---

<sup>2</sup> 主人公、主役

<sup>3</sup> 巻末に添付

続いて3月1日に日本陸軍が大挙してジャワ島に押し寄せ、バンテン海岸・エレタン・クラガンの三カ所から上陸して攻略目標の諸都市に向かった。

東部ジャワのクラガンに上陸した部隊はババツの西隣にあるボウエモに向かい、上陸してからほんの数日後に姿を現した。ボウエモには植民地軍が先にやってきて防衛線を作り、日本軍を歓迎してはならないと地元民を脅かしていた。いざ日本軍先遣部隊がボウエモに姿を現すと、守備隊との間でしばらく銃撃戦が行われたが、そのうちに守備隊はいなくなった。そしてしばらくすると日本軍の歩兵大部隊が日中にそこを通過し、夕方になって大量の戦車が隊列を組んで歩兵部隊の後を追って通過した。大量の戦車が轟音を立てて次々に通過していく姿を住民は驚きの目で眺めた。東インド植民地軍のそんな姿を見たことがなかったからだ。

植民地軍防衛部隊はスラバヤに後退するため、ブガワンソロにかかっている橋を次々に爆破した。その日を境にして、ボウエモ周辺の村々では植民地軍兵士の姿を見ることがなくなり、変わってボウエモを通る日本軍部隊のトラックコンボイばかりを目にするようになった。ときどきボウエモで停車するトラックがあると村の子供たちが大勢集まって来てトラックにたかり、日本軍兵士と交歓する様子が見られた。そんなエピソードが語られている。

軍政が始まってから、多くの地方でプリブミの生活環境の中に日本人の姿が混じるようになった。日本人のライフスタイルが目に見える日常がやってきたのである。最初プリブミの間で取りざたされたのが風呂敷だった。日本人は買い物に行くときに大きな布を持っていき、買った品物をそれに包んで持ち帰る。プリブミが大きな布包みを持ってウロウロするのはルバランの時のカンブンに限られていたので、その違いが関心の的になり、中にはそのあまり颯爽としない姿を揶揄する者もいた。またそれとは別に、日本兵の歩く足音があまり軽やかでなく、靴を引きずるような音に聞こえたようで、「靴に足をあわせろ」がどうやら見破られていたのではあるまいか。

プリブミも日本陸軍の階級制度をすぐに覚えた。相手の階級に応じた対応をしなければ身が危うい。軍服

の左右の襟に縫い付けられている赤色の四角い布が階級章で、下っ端兵士はそこに布の星型が1個から3個見られた。それが二等兵から上等兵までの三階級。その上の兵長は赤色の四角い布に黄色い横線が一本入っただけ。

その上の下士官は赤色の四角い布に黄色い横線が一本入り、そこに白い金属製の星が1個から3個まで縫い付けられていた。伍長・軍曹・曹長だ。下士官は軍刀を腰に吊ったが、鞘が将校のように皮に包まれておらず、金属の鞘がむき出しになっていた。この下士官の中の伍長と軍曹がプリブミにあれこれ仕掛けてきて、すぐにピンタをはる傾向が高かったために、プリブミはできるだけかれらを避けようとした。一方の伍長や軍曹たちは軟弱な土人に活を入れて教育することを好んだ。そのころの日本人は一般に土着の原住民を土人と称していた。[ 続く ]

## 「北の黄色い小人(8)」(2023年01月06日)

下士官兵の中に、統治支配者の地位をかさにきてプリブミを非人道的に扱う者もあったが、好んでインドネシア人と親しくなるように努めた者もたくさんいた。インドネシア語を覚えた者の中に、「ニッポン インドネシア サマサマ」というまるで宣伝部が作る懐柔スローガンのような言葉を言う者たちもあった。

ところが将校はその顔つきから姿勢や立ち居振る舞いに至るまでたいそうな威厳と落ち着きを示し、まるで下士官兵とは人種が違うのではないかという印象をプリブミに与えた。帯剣し、長靴を履いて軍装に身を包んだ姿は、見栄えの良い伊達男を彷彿とさせるものだったようだ。

日本のサムライ制度は明治維新によって廃止されたにもかかわらず、その精神は軍隊の中に滔々と流れ込んだ。日本の軍人精神は武士道を踏まえたものになり、将校たちは武士をもって自ら任じた。将校の階級は尉官・佐官・将官に別れており、ジャワ島を統治する駐留軍のトップは中将が最高指揮官を務め、少将が地方部の要所を統括した。

将校は夜間の外出を私服で行うことが許されていたので、レストラン・映画館・夜市・将校クラブなどに私服で出かけることが多かったらしい。中にはプリブミの帽子ペチをかぶるのを好んだ者もいたようだ。

将校の中には英語を流暢に話す者がおり、また軍医の中にもドイツ語が堪能な者がいた。そして高等教育を受けた知識層であるために、かれらはインドネシアの知識人や青年知識層と交わることを好み、中には友人になったインドネシア人からインドネシア語を学ぶ者もあった。

仲良くなったインドネシア人青年と日本軍将校は日曜日にジャカルタの郊外へ自転車でピクニックに行っ



たり、池で魚釣りをしたり、郊外のデサに住む村役の家に立ち寄って昼食を食べたりした。当時のデサの住民は生活環境の中で食材を得るのが普通であり、調理法も昔ながらの伝統的なものだったから、日本人将校はご飯がとても美味しいことを不思議がり、また日本人にとって珍しいペペス料理に舌鼓を打った。日本人は鯉<sup>4</sup>のペペスをたいへん好んだという話だ。

そんな将校の中にも、伍長や軍曹のように軟弱な土人を教育しようとする者がいて、土人のアラを探してはビンタを張った。それをするのはだいたい少尉が多かったらしい。インドネシア人はその時代の日本人の暴力性に驚かされた。プリブミを殴ることをオランダ人がしなかったわけでは決してないものの、かれらがなじんだヨーロッパ文明における暴力性とはたいへん異なる日本人の暴力性に目をみはったということだ。それは暴力というものの本質論でなくて、様式の違いがもたらしたもののようにわたしには思われる。

日本人とオランダ人の間に見られたプリブミを殴る現象における違いをたくさんのプリブミが書き残している。その違いとは、オランダ人は相手の悪いところや間違っただ点をくどくどと説明してから殴るが、日本人は何も言わずに手が先に出た。その矢面に立たされたプリブミたちの多くは日本人の行為に、まるで人間がすることとは思えないという感想を抱いたそうだが、そのコメントはヨーロッパの人間観に従ったものだろう。

---

<sup>4</sup> Ikan mas (Cyprinus carpio) インドネシアでは 1920 年代から養殖が始まった。(wikipedia) 鯉の種類ではあるが、鯉とは異なり Y 字骨が無くて食べやすい。



殴ることを反省のきっかけにするという日本式教育法は人間の資質に関する一種の英才教育ではないだろうか。殴られるのは自分の落ち度や不足を告げていることであり、その原因を自分の中に探るという反省行動を自らの意志で行い、それを突き止めて今後の自分のあり方に反映させていくことがこの教育法の目指す内容だったように思われる。

だがこの教育法を尊師だけが行ったのではなく、加虐志向の暴力愛好者も尊師の顔をして同じことをした。そしてこの教育メソッドを受けられる能力を持っている生徒も数が限られていた。大多数の者は猿回しのサルが行う反省ポーズでそれを乗り切ったのではなかったろうか。効率について言うなら、それは効率が悪く、しかも暴力を使うという点で劣悪な教育メソッドだったと言えるだろう。しかしそれで百人中の5人10人が素晴らしい資質を持つようになるなら、それをしないまま一人二人の優れた人間が自然発生的に現れるのを待つよりも行動的積極的であり、暴力を伴うことだけを理由にして排斥されるべきものとも言えない気がするのだが、結局のところは社会が持つ「人間とは何か」という哲学が最終決断を下すことがらになるように思われる。

[ 続く ]

## 「北の黄色い小人(9)」(2023年01月09日)

少尉が尊大な態度で威勢よく活発に手を出していたのと対照的に、佐官級はおとなしく穏やかで、よくスマイルを口元に浮かべていた。とはいえ、眼光は鋭く、指揮を執る際には堂々としたよく通る大声を発し、話しぶりにもたいへんな威厳が備わっていた。

将官たちは概して老齢で、好々爺のごとく微笑みと温かいソフトな話しぶりが印象的だった。しかしその表情に浮かぶ意志力や精神統一の力は他の者に見出すことができないほど重厚だった。

階級が上がるにつれて人当たりが柔らかくなっていく日本軍将校の精神的な傾向が、日本軍政組織と頻りに接触したプリブミたちを強く印象付けたようだ。

ラトゥアディルのシナリオは実行されて、白人の支配は終わった。解放者は最初、蘭領東インドという呼称を公式にインドネシアに変え、インドネシアラヤを歌い、紅白旗の掲揚を許したが、「君が代」と「日章旗」に並べることを条件にした。白人がいなくなったために空白になった公職にインドネシア人を就任させたが、各ブロックの最高位の座は日本人が握った。ムラユ語を公用語にしてそれをインドネシア語と呼んだが、書き言葉の綴りはオランダ時代のままだった。

日本軍政初期の蜜月時代、インドネシア人は解放者の日本人に親愛の情を寄せ、その状況の変化を喜び、民衆は日本兵に手を振ったりしてなつた。ところがしばらくしてから、インドネシアラヤも紅白旗も禁止された。そりゃそうだろう。団体や組織が公式行事として行うときにそれを守らせることはできても、民衆生活の中でそれを実行させるのはまず不可能なのだから。しかし青年層や知識層は日本軍政の本性をそこに垣間見たように思ったという話だ。

インドネシア人の側にも誤解と言うか過剰な期待があったのは間違いあるまい。インドネシアを白人支配から解放するために来るという話は昔からインドネシア人の間でジョヨボヨの予言にからめて語られていたのだし、日本人もタテマエとしてそのように語ったのだから、そこだけを見るなら解放者の到来とその成功は善事なのである。そしてそれらはその言葉通りに実現した。

するとこんな期待がインドネシアの民衆の間に生まれたかもしれない。われわれが白人支配のくびきから解放されたのは善事だ。善事を行うのは善人である。善人の統治は善政になるだろう。しかし日本軍がインドネシアにやってきて白人を追い出し占領した目的は別のところにあった。インドネシア人にとっての善人になるためにしたことではない。

考えてもみればいい。5万5千人という大量の人員をジャワ島に運び、ジャワ島防衛軍と7日間戦争をして白人を降伏させた。その軍事行動にどのくらいの戦費がかかったのだろうか？そのすべてを自腹でまかない、インドネシアの人民を白人支配から解放したから自分たちはもう用がない、という論理を国家が持つことはありうるだろうか？その後から経済問題が付いてくることを当然と思わなければならないのではあるま

いか。ましてや蘭領東インド進攻は諸方面に広範囲に伸びきった戦線を維持するための資源庫を当て込んで建てられた当初からの戦略であり、コメや石油をはじめとする諸資源を運び出すことはもちろん計画通り行われ、最低限の量しかインドネシア人のために残されなかった。

解放の代償はそのようにしてインドネシア人に背負わされたのだが、楽観論でものごとを見ていたインドネシア人はこの現象の裏側にあるメカニズムを悪意で眺めた。350年間の白人支配時代にはひどいこともあったが良いこともあった。三年半の日本時代はひどいことばかりが続いた。続いたのも当然だ。なにしろその三年半の全期間が戦争中だったのだから。そんな比較対照をされたなら、短期支配者の評価が悪くなってもおかしくあるまい。物資不足と困窮は日本時代の方がひどかったと語るコメントは少なくない。[ 続く ]

## 「北の黄色い小人(終)」(2023年01月10日)

日本は戦争中、物資不足と困窮への耐乏生活を自国民に強いたし、占領地のインドネシアでも同じような姿勢を執った。インドネシアの資源を取り上げたのは、自国民に繁栄を享受させるためでなく、戦争遂行に使うことが第一目標とされたのだ。客観的に言うなら、インドネシアの犠牲の上に直接的に自国の繁栄を築こうとしていたのではなかったと言えるだろう。戦争遂行の先にあるものを目指して自国民にもジャワの民衆にも犠牲を強いていたということになる。

一方皮肉なことに白人支配下の時代には、原因が戦争であれ何であれ、オランダ本国が困窮しているときにインドネシア人の生活基幹物資を取り上げて運び去るようなことが起こらなかった。オランダ人が行ったのはインドネシアが生み出す富を搾取することであり、その富を使って本国を繁栄させたのだ。その富を作らせるためにインドネシア人自身のための生活基幹物資の生産が低下したことはあっても、インドネシア人が作った生活用物資に手を付けることは起こらなかったように思われる。

そのような比較と評価をインドネシア人の目を通して行ったとき、白人からの解放者が持った本性の悪辣さが浮かび上がって来てもおかしくはなかつただろう。しかしその評価はフェアネスに欠けているのではない

オブティミスト

か？

そのうちにだんだんと、インドネシア人は日本人の民族性に直接触れることになった。自己尊大の傾向が生む傲慢さ、視野の狭さがもたらす狭隘な精神、理性を研磨して論理性を高めることを怠るゆえの非合理性、衝動的な情緒、同族同郷の風土に安住したがるムラビト精神……。それらが一体となってあの戦争を終わらせる方向に作用したと語る日本人の論説もある。戦前にインドネシアで空中浮遊するに至ったプロタゴニストのイメージは、いつの間にか地上に落ちて路傍に転がっていた。

1942年3月のバタヴィアに向かう大行進をピークにして、黄色い小人の偶像は精彩を失っていった。偶像は観念の中においてこそ光芒を放つものであり、偶像が生身を持ったときに幻滅が影を落とすのが世の常ではないかとわたしは思っている。

ジョヨボヨの予言の実現という形で幕を開いたインドネシアにおける日本軍政は三年半の間に、インドネシア人にとって善事から凶事に変化していったにちがいない。1942年3月1日に起こった集団ヒステリーだけを見て日本軍のジャワ島占領を善事だったと言う見方は推移や変化という要素を見落としていないだろうか？

凶事という評価への変化の中に、インドネシア人側の一方的な思い込みが混じりこんでいたことは上で触れたとおりだ。白人の支配下から解放されたらインドネシア人の生活の繁栄と幸福がすぐにやってくるという期待は現実離れした甘い考えだろう。だが、それが人間というものではなかったらどうか？

ジョヨボヨの予言はすべてその言葉通りに実現した。北の黄色い小人が白人の支配下からジャワを解放した。そのあと、ジャワ人がすぐに繁栄と幸福を謳歌することになっていたか？そんなことはひと言も予言の中に書かれていなかった。そのあとは北の黄色い小人が短期間の支配を行ってから去っていくと書かれていたのだ。そのときはじめてジャワがジャワ人のものになる。その最終フェーズで繁栄と幸福がジャワ人の

頭上におのずとやってくるだろうか？異民族支配者が去ったらそうなるというのは、楽観主義者の身勝手な短絡的結論だろう。それすらジョヨボヨはいっさい保証していないのだから。歴史はジョヨボヨの予言通りに動いている。[ 完 ]

## 「トコジュパン(前)」(2019年11月18日)

店を意味するトコ toko というインドネシア語は福建語の「土庫」に由来しているそうだ。福建語発音は tho-kho となっている。

何世紀も前から、移住してきた華人(つまり華僑)やその子孫たち(華人系原住民)は行商で財ができると店を構えた。それが出世ということの象徴だった。

プリブミはそんな店をトコチナ toko Cina と呼んだ。二十世紀に入ってから、移住してきた日本人が開いた商店はトコジュパン toko Jepang とインドネシア人に呼ばれた。

アラブ人やインド人の店はトコアラブ toko Arab やトコクリン toko Keling と呼ばれていたが、昔のことを書いた記事にはまったく登場しない。トコチナとトコジュパンがそれだけインドネシア原住民の生活に強い関りを持っていたということなのだろうか？

トコチナはオルバレジームが始まってその言葉が消滅した感がある。反対にトコジュパンは日本軍の進攻開始直前に姿を消した。

さて、そのトコジュパンについてインドネシア人が語る話は、東南アジアに日本を震源とする戦雲が急を告げ始めたころから蘭領東インドにトコジュパンが増加し、店は清潔でよく整頓され、店主は腰が低く、客には差別待遇をせず誰にも親切丁寧で、元気が良くて笑顔を絶やさないといい評判がプリブミの間に確立され、商品も良かったのでプリブミ社会の人気の高まった、という話で幕が開く。

ところが大東亜戦争が始まったとき、トコジュパンはみんな店を閉め、日本人は姿を消した。そして日本軍が蘭領東インドの各地を制圧し、占領軍がその各地を治めるためにやってきたとき、占領軍幹部の中にいる将校のひとりがトコジュパンの商店主だったことに原住民はみんな驚いた、というのがトコジュパンについてインドネシア人が物語るストーリーの標準版になっている。

この話は更に、かれらトコジュパンの店主は各町の状況を余すところなくスパイするのを目的にしてやっ

てきた諜報員であり、日本軍というのはそこまで綿密な計画の下にインドネシアに進攻してきたのだという賛辞を引き寄せる。だが国が、あるいは日本軍という組織が計画的にそれを行ったのかどうかについては、まったく情報が得られないために検証のしようがない。

言うまでもなく「皇国の南進政策の一助となって身命を賭す」という空気が日本軍進攻のずっと以前から国内にあったことも確かであり、個人的行為がその発端だった可能性も大いにあるとわたしは思うのだが。

Japan at War: An Oral History という書籍の中にそのような空気と国家主義者に動かされた青年の物語を見ることができる。日大の学生ノギ・ハルミチは愛国学生連盟への参加を誘われた。かれをリクルートした人間は、秘密任務を与えるために君をリクルートしたのだ、と言う。話を聞くと、愛国学生連盟は国際反共連盟の下部組織であり、岩田愛之助 という右翼の大物がその指導者になっている。岩田愛之助なる人物は1926年に蘭領東インドを訪れ、長期滞在をして各地を見て回った。

あるときノギが岩田愛之助の下を訪れた時、蘭領東インドから戻って来たばかりの青年が20人いた。かれらはスラバヤをはじめいくつかの町にある百貨店で働き、ムラユ語の習得に努め、十二分に使いこなせる域に達していた。ノギはそこで蘭領東インド独立のために自分たちは何をすべきかという討論に加わり、夢と抱負を抱くようになる。

連盟が目黒に持っている塾の指導者カネコの生徒のひとりが吉住留五郎だった。吉住は早くから蘭印に入ってインドネシア独立運動の手助けをしていたが、オランダ植民地政庁にしてみれば、日本人が現地でインドネシアの独立支援運動を行うというのは国内かく乱を狙うスパイの扇動行為ということになる。トコジュパン店主の現地状況把握というスパイ行為とは多少趣が異なっても、軍事戦略と言うレベルで見るとその間の違いはなくなってくる。

ムラユ語を身に着けたノギは海軍に入り、日本軍の東インド占領時に通訳として活躍した。インドネシア人著者の書いた Tarakan, "Pearl Harbour" Indonesia と題する書物には、キタムラという日本人がオランダ人を欺いて華人業者と思い込ませ、東カリマンタンのタラカン島に対日防衛戦のために作る軍事施設の建設を請負い、そのためにタラカン島の防衛能力の実態が日本軍に筒抜けになっていたという話が書かれている。

東京日日新聞1942年1月14日付け記事の中に「この島にも請負業と雑貨商を営んでいた北村新吉さん外五、六名の日本人が進出していましたが・・・」という文章が見られるので、その北村新吉さんがキタムラであるなら、典型的なトコジュパンスパイ説の実例とすることができそうだ。[ 続く ]

## 「トコジュパン(後)」(2019年11月19日)

蘭領東インドにおける日本人の位置付けが1899年にヨーロッパ人と同じ人種ステータスを与えられたことによって、日本人の渡航と居住に追い風が生じたことは疑いもない。

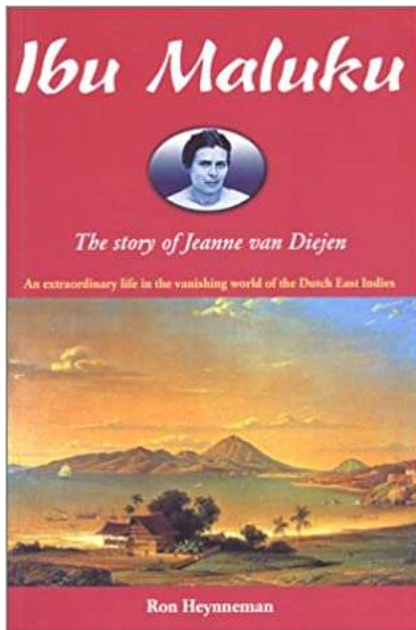
1900年ごろ東インドに居住していた日本人は売春婦や芸者などの慰安婦をメインに5百人ほどが登録されていたにすぎないが、1940年には8千人に膨れ上がっている。

日本軍進攻前に急増した日本人はほとんどがオープンな社会生活を営まず、何をしているのかよくわからない暮らしぶりだったそうで、日本軍が進攻してきたときに「かれらは日本軍のスパイだったのだ」という憶測がプリブミの間に広まった。この話とトコジュパンの店主の話がどう絡むのか、わたしにはよくわからない。

インドネシア人作家の書いた「かれらはスパイだったのか？」と題する書物には、1910年ごろに始まって1941年まで続いたトコジュパンの時代にジャワ島にいた日本人たちの人種差別意識が記されている。

抜き書きすると、「日本人移住者社会とプリブミ社会の関係があまり活発なものでなかったのは、日本人の原住民に対する視点が上から下への位置関係にあったことに影響されている。実態として日本人はプリブミを劣等視した。ほとんどの日本人がプリブミを、怠け者で、未成熟で子供っぽく、緊張感を持っていない、と見なした。反対にかれらはオランダ植民地主義が生み出した諸システムを効率的・生産的だと考えて、それに憧れの目を向けた。」





スカルノ大統領がマルクの母 Ibu Maluku という尊称を与えた女性がある。ジャンヌ・ファン・ディーイエン・ルーメン Jeanne van Diejen-Roemen は第二次大戦後、数百人にのぼるマルクのハンセン病罹患者を勇気付けて、世の中で社会の一員として生きるべく指導したり、またへき地の森の奥に住む文明化の遅れた社会を現代化させることに骨を折った。その事実を知ったスカルノがかの女を絶賛してその尊称を送ったのである。

この女性の生涯を描いた Ibu Maluku: The Story of Jeanne van Diejen という書籍から、日本軍進攻に関連してテルナーテで起こったさまざまなことがらを知ることができる。

1934年にマナドには日本人が経営する小さいチャーター船会社があって、その持ち船 Honun Maru は客の希望するどこにでも行った。北スラウェシからマルクにかけての海域が主な行動エリアで、その地域にはコプラ農園を持つオランダ人がたくさん住んでいたため、チャーター客に事欠かなかったせいだ。

地元物産を積んでどこかに送り届けるための航海をしている Honun Maru の姿がよく見うけられたし、日本軍のテルナーテ進攻の直前には北マルクからアンボンに大勢のオランダ人を運んだこともある。

開戦前には、日本の漁船が多数マルク海域にやってきたという話がかの女の耳に入った。船はカオ湾やモロタイ島の周辺に毎日出没した。ところが情報通の話によると、それは漁船に偽装した漁船より大型の軍艦であり、海岸線を写真撮影したり、水深を測定したりしていたそうだ。

マリエという名の、ジャンヌと親しい日本人女性がいた。マリエはジャンヌに、もうすぐ日本軍が攻めてくるという話をしたこともある。そして状況が悪化した時に知っておいたほうがよい日本語をジャンヌに教えた。ただし日本兵の前では知らないふりをしろ、と言った。

マリエはオランダの官憲にスパイと疑われ、強制連行されたままオーストラリアに送られた。

トコジュパン

テルナーテでかなり大きいトコジュパンの息子とジャンヌは親しかった。ところがイガワという名のその青年とかれの一家はある日テルナーテからいなくなり、店は閉まったままになった。

テルナーテを占領統治するために日本軍がやってきたとき、港に入った船のひとつにイガワが乗っているのを見てかの女は驚いた。かの女が声をかけるとイガワは、「昔は昔、今は今だ。よく覚えとけ。」と昔の優しく穏やかな様子をかなぐり捨てた怒声で応対され、ジャンヌは二の句が継げなかった。

テルナーテの副レシデンやオランダ軍上層部の人間を探し出す任務をイガワは与えられていたらしい。該当者が「自分はその人物でない。」とごまかして逃げることなど、イガワの前でできる話ではなかったということだ。

そのようなできごとがテルナーテで起こっていたのである。イガワの話はインドネシアに一般的なトコジュパン物語の典型例のひとつにちがいない。[ 完 ]

## 「月明のジャワ海に没す」

スラバヤ市内のクバンクニン(Kembangkuning)墓地はネーデルランド王国陸海軍軍人、蘭領東インド軍兵士、そして東ジャワの抑留キャンプで生命を落としたひとびとが葬られている戦争墓地だ。この墓地はオランダ大使館内の戦争墓地財団が管理しており、中へ入るためにはジャカルタに許可を申請しなければならない。なぜなら、そこはオランダの外交特権下にある土地だからである。

そこには5千を超える墓碑がある。タラカン・クパン・アンボン・バリツパパン・マカッサル・ニューギニアなど各地で散った英霊が終戦後20年以上を経て段階的にここへ集められた。再埋葬された英霊の墓碑にある年号はそこへ移された年号が記されているため、それを知らない人間を驚かせるのに十分な仕掛けになっている。

普段は静かなこの戦争墓地が、2012年2月27日、60人を超える大勢の来訪者でにぎわった。墓地の中央には白亜の大きい廟があり、正面中央にはひとりの軍人の肖像を描いたブロンズ板が掲げられている。その人物こそ、1942年2月27日に行われた日本海軍との戦闘で連合軍艦隊の指揮をとったカレル・ドールマン少将であり、かれの座乗する旗艦デロイテルは深夜の艦隊夜戦で海のもくずと消えた。この廟は、かれの戦功を讃えるとともに蘭印の国土防衛のためにその海戦で海に沈んだ艦艇乗組員たちの霊を慰めるために建てられた鎮魂の記念碑なのである。ドールマン提督の肖像の左側には、かれが乗った旗艦デロイテルがジャワ、コルテノールらを従えて航行する勇姿を描くブロンズ板が掲げられ、右側にはその艦名の由来となったネーデルランド王国海軍の英雄的司令官のひとりデ・ロイテル提督が活躍した時代の帆走式海軍軍船の勇姿が浮き彫りにされたブロンズ板が掲げられている。

ジャワ海海戦70周年を記念して催されたこの日の集いでは、参列した60人あまりの遺族を前にして駐インドネシアオランダ大使が海軍兵士三名に付き添われて太鼓とラツパの伴奏の中を廟に向かって歩み、赤白青の三色リボンを結んだ花輪をドールマン提督のブロンズ板の前に置いた。続いてカレル・ドールマン提督の孫ヤン・マールテン・ドールマンが花輪を行進する艦隊のブロンズ板の前に置いた。

ジャワ海海戦で海に散った軍人951人の中には220人の植民地原住民が含まれている。廟の裏側にはその名前を刻んだブロンズ板が掲げられており、そこにはオランダ人・オランダと現地の混血者・そして純現地人の名前と認識番号や階級部署などが刻まれている。蘭印に置かれたネーデルランド王国海軍も現地人を募集したが、戦闘要員ではなく機関室や操艦助手、調理場あるいは補助的な雑用係として艦内勤務をさせた。陸軍が数百年前から戦闘部隊として現地人を使う伝統を作り上げていたのとは対照的だ。

現地人はマカッサルの航海学校で募集され、採用された者の中にはジャワ族スダ族マルク族ミナハサ族バタック族などを出自とするひとびとが多かった。蘭領東インドへの侵攻戦が百パーセント日本民族とオランダ人を主にした西洋人との間の戦争だけにとどまっていなかったことをそれは意味している。さらに言うなら、太平洋戦争で東南アジア諸国へ侵攻した日本軍の矢面に、各国の植民地で防衛軍の中に編成された原住民部隊が銃を持って立ったケースは枚挙にいとまがない。当時の日本にしても、外国に領土を持ってその地の人間を兵士に徴用し、戦場に送り出していた事実もある。バタビアに向けて行軍する日本軍兵士を、ムルデカを叫びながら土下座し歓呼の声で迎えた現地人ばかりでなかったという事実にも、われわれは眼を向けなければならないだろう。

スピーチと黙祷のあと、参列者たちは70年前に散っていった英霊をしのんで、銘板に花びらを降らせた。儀式の最後に参列者たちは敷地内の一角に設けられた飲食の接待を受け、ブルマドゥラの味覚を愉しんでいた。

フィリピンとマラヤ・シンガポールが陥落したあと、蘭領東インドの牙城であるジャワは日本軍の前に直接その姿をさらすことになった。連合軍が依然として大きい戦力を残存させているジャワ島の攻略は周辺部を段階的に切り取ったあとで集中的に行う、という戦略を日本軍は立て、1942年1月からカリマンタン島とスラウェシ島の軍事要衝を順次陥落させつつ、アンボン島・スマトラ島・ティモール島・バリ島に日章旗を翻らせてジャワ島包囲網を狭めていった。

ジャワ島の連合軍はその動きから、日本軍は三つのルートからジャワへ押し寄せてくると見た。東側はマルク～ティモールを経て南下してくるルート、中央はフィリピンからカリマンタンとスラウェシの間を通過して南

下するルート、そして西側はマラヤ・シンガポールからジャワ海へ入ってくるルートの三本。大量の艦船と航空機を持ち連戦連勝で戦意の高い日本軍を劣勢な数の艦艇と航空機で迎え撃つ連合軍側は、海上戦に備えて艦隊をひとつにまとめなければならなかった。防衛ラインはジャワ海であり、ジャワ海に入ってくるようとする日本艦隊をその最前線で叩くための戦術が、艦隊指揮官の基本方針となった。

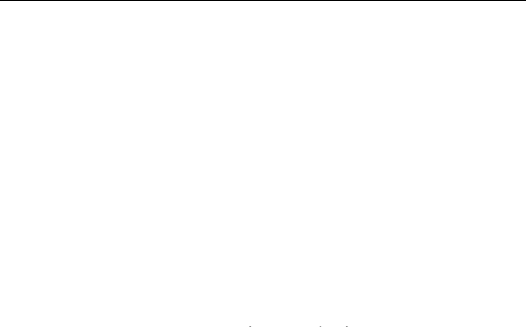
ジャワにはフィリピンから脱出してきたアメリカ海軍とシンガポールから逃れてきたイギリス海軍そしてイギリスに協力して参戦したオーストラリア海軍の艦艇が集まっていた。植民地の防衛に敗れて逃れてきたアメリカ人とイギリス人にとって、戦意が低下していることに加えてジャワ島が陥落しようがしまいが自分たちの基盤に関わる問題ではないということが、日本軍の侵攻を正面から受けて立つ姿勢を曖昧なものにしていた。一方、いまや本国がナチスドイツに蹂躪されてしまった蘭印のオランダ人にとってジャワ島はもはや単なる植民地を超えたものになっていた。ドールマン連合艦隊司令官にとっての困難はそこにあった。

ドールマン提督の指揮下に置かれた艦隊は次のようなものだった。各国艦隊の陣容はこれだ。

＜オランダ艦隊＞	
	
<p>軽巡 デロイテル De Ruyter</p>	<p>軽巡 ジャワ Hr. Ms. Java</p>
	
<p>軽巡 トロンプ Hr. Ms. Tromp</p>	<p>駆逐艦 ピートハイン Hr. Ms. Piet Hein</p>



駆逐艦 コルテノール



駆逐艦 ヴィテデヴィット

<アメリカ艦隊>



重巡 ヒューストン USS Houston, CL/CA-30



軽巡 マーブルヘッド USS Marblehead, CL-12



駆逐艦 スチュワート USS Stewart, DD-224



駆逐艦 パロット USS Parrott, DD-218



駆逐艦 ビルスベリー USS Pillsbury, DD-227



駆逐艦 ジョンDエドワーズ USS John D. Edwards, DD-216

 <p>駆逐艦 ポールジョーンズ USS Paul Jones, DD-10</p>	<p>駆逐艦 ジョンDフォード USS John D. Ford, DD-228</p>
<p>駆逐艦 アルデン USS Alden, DD-211</p>	<p>駆逐艦 ポープ USS Pope, DD-225</p>
<p>&lt;イギリス艦隊&gt;</p>	
 <p>重巡 エクゼター HMS Exeter, 68</p>	 <p>駆逐艦 エレクトラ HMS Electra (H 27)</p>
 <p>駆逐艦 エンカウンター HMS Encounter (H10)</p>	 <p>駆逐艦 ジュピター HMS Jupiter, F85</p>
<p>&lt;オーストラリア艦隊&gt;</p>	
 <p>軽巡 パース HMAS Perth, D29</p>	

その寄合所帯を統括して指揮をとることをオランダ艦隊司令官カレル・ドールマン少将が命じられたのは、その時の最高司令官の順当な配慮だったにちがいない。艦隊はスラバヤに本拠を置き、ジャワ海目指して南下してくる日本軍を捕捉し、痛打を与えて撃退するために臨戦態勢に入っていた。

1942年1月に、ジャワに集まってきていた各国艦隊をまとめて連合艦隊が編成されたとき、連合軍総司令官の座に就いたのはアメリカ海軍のハート提督だった。ハート提督の戦力温存方針がジャワ島を死守しようとする意気込みの高かったオランダ人から不評を買ったのは当然の結果だったと言えよう。守りきれないのがほぼ確実と思われるジャワ島のために多数の巡洋艦と駆逐艦を犠牲にするのは適切な戦略ではなく、温存しておいて捲土重来の機が至ればその戦力を活用することこそ大きい意味を持つのであるという考え方は、支えきれなくなれば逃げ出すというフィリピンで起こったことを思い出させるものであり、帰るべき本国を失った蘭印のオランダ人にはとうてい受け入れることのできないコンセプトだったようだ。われわれはそこに、勝つために戦争をするひとびとと、死ぬために戦争をするひとびとの本質的な違いを見出すのである。

そして2月12日、ハート提督は解任されて蘭領東インド軍総司令官ヘルフリッチ中将が連合軍総司令官の座に着いた。ハート提督はオランダ艦隊司令官カレル・ドールマン少将を連合艦隊司令官に任命していたが、その指揮振りには不満があったようで、ハート提督のその人選には異なる思惑があったように感じられる。連合軍の総司令官がヘルフリッチ中将になったと同様、陸軍はウェーベル大将からテル・ポールテン中将に、空軍はブレトン少将からファン・オイエン少将へとそれぞれの司令官に交代が起こり、オランダ側の意向に即した体制への転換が行われた。

ヘルフリッチ中将のジャワ島死守方針の結果、ジャワ海海戦を中心にした一連の戦闘で連合艦隊は壊滅し、中でもオランダ艦隊はバリ島での海戦で損傷したためオーストラリアへ回航されたトロンプを除いて全艦が沈没した。ジャワ島防衛に参加した各国艦隊にも多くの被害が出た。とはいえ、ヘルフリッチ中将の方針はオランダ人大多数の考えでもあり、その立場に置かれたならばだれでもそうせざるを得ない順当なものであったことは間違いない。



ヘルフリッチ中将は後に1945年9月2日に東京湾に入ったアメリカ戦艦ミズーリ号艦上で行われた降伏調印式で、ネーデルランド王国を代表して降伏文書に署名している。それはさておき、ネーデルランド王国海軍の英雄に祭り上げられたのはヘルフリッチでなく、カレル・ドールマンだったのである。これはきっと軍人にとっての死の美学に関わることからであったにちがいない。

1942年2月18日、日本軍バリ島攻略部隊がマカッサルを出た。陸軍第48師団の一部で編成した支隊を乗せた輸送船2隻は、駆逐艦大潮、朝潮、満潮に護衛され、さらに駆逐艦荒潮がそこに合流してバリ島を目指し、ロンボッ海峡を抜けてから、バリ島の南部東岸でトゥバン(Tuban)飛行場(現在のグラライ空港)に近いサヌル(Sanur)海岸に到着した。夜半に上陸が開始され、陸地からの攻撃は一切なく、上陸作業は進展したが、夜が明けてからアメリカ陸軍航空隊の爆撃機が襲来し、輸送船相模丸が被弾した。双発スクリューのひとつが機能を停止したため相模丸は船隊航行が不能となり、荒潮と満潮が護衛して先にマカッサルへ帰還することになった。それが19日夕方のこと。トゥバン飛行場は19日のうちに日本軍の占領が完了している。



日本軍攻略部隊が南下中であることを哨戒中のイギリス潜水艦トルーアントとアメリカ潜水艦シーウルフ

月明のジャワ海に没す

が発見し、連合国側は空爆と艦隊による反撃を決めた。ドールマン司令官はデロイテル・ジャワ・ピートハイ  
ン・フォード・ポープの5隻とトロンプ・スチュワート・パロット・エドワーズ・ビルスベリーの5隻を二隊にわけて  
バリ島バドゥン海峡へ発進させた。

もう一隻の輸送船笹子丸の上陸作業が終わったのは19日の夜中で、護衛の二艦とマカッサルへ戻るた  
めに現場を離脱しようとしたとき、朝潮の見張り員が南方に不審な艦影を見つけた。大潮は前方哨  
戒のために先にサヌル海岸を離れて北上しており、朝潮が輸送船に付き添って出発を開始したちょうどその  
ときの出来事だ。

3キロ先を航行中の大潮に「敵艦発見」を連絡すると、朝潮は敵艦隊に向けて全速走行に移った。大潮も  
急反転して同じ方向に突進する。

デロイテルとジャワは向かってきた二隻の駆逐艦に照明弾を撃ちあげて砲撃を開始するものの、高速で  
動き回る二隻の敵艦に対する有効打が出ないままその接近を許してしまい、オランダ巡洋艦二隻は戦線離  
脱をはかって駆逐艦ピートハインに煙幕を張らせた。ピートハインも煙幕の中に潜り込むと思いきや、煙幕  
の外に走り出てきたピートハインに朝潮と大潮が襲い掛かる。

双方が砲弾と魚雷を撃ち交わす中で、朝潮が放った魚雷の一本がピートハインに命中し、ピートハインは  
火柱に包まれて沈没した。朝潮と大潮はさらに敵部隊を探して航行を続け、数分後にフォードとポープを発  
見して交戦が始まったが、互いに戦果のないままアメリカ駆逐艦二隻は戦線を離脱した。そこへトロンプに  
先導された連合国第二戦隊が到着して朝潮と大潮との間に雷砲撃戦が始まり、大潮は小破し、トロンプは  
中破した。

朝潮が発した戦闘戦果報告の無電を、相模丸を警護して先に航行中だった荒潮と満潮がキャッチし、そ  
の二隻も急遽戦場に向けて反転してきた。そして朝潮と大潮の二隻と交戦してきたばかりの連合国艦隊第  
二戦隊に遭遇したのである。海上夜戦が始まるが、戦闘隊形は単縦陣のまま変更されなかったため、すれ  
ちがいざまの反航戦が展開され、戦闘が終わると両者ともに夜の闇の中に消えていく形となった。この戦闘  
では満潮が被弾して機関が故障したため集中砲火を浴び、大きな損害を出したが沈没は免れた。大破した

満潮は僚艦荒潮に曳航されてマカッサルに帰投した。連合艦隊はスチュワートが小破した。こうして2月20日未明にバリ島沖海戦は幕を閉じた。

それまでも繰り返し行われてきた日本軍の空爆で連合艦隊の多くの船に被害が出ていた。ジャワ海の制空権は日本軍の手中におち、弱体の航空戦力を嘆く声は多かった。アメリカ軽巡マーブルヘッドは修理のためにコロンボに曳航され、そのあとジャワに戻らず本国へ帰還した。アメリカ重巡ヒューストンがジャワ島インド洋側の要港チラチャップ(Cilacap)で修理されることになった。

手ごまがどんどん戦列から削ぎ落とされ、補充はほとんど期待できないという状況下にドールマン提督と連合艦隊は置かれていたのである。

ジャワ島進攻作戦を前にして日本艦隊が三つの南下ルートを進撃中との情報は連合軍司令部に入っていた。大船団が南シナ海からカリマタ海峡に進出してきていること、スル海からマカッサル海峡に進出してきた艦隊はパウエアン(Bawean)島に迫っていること、ジャワ海東部ではバリ島北方のカゲアン(Kangean)島に敵影が濃いこと。

2月25日夕方、スラバヤの海軍総司令部にドールマン提督は各国艦隊司令官と上級参謀を集めて作戦会議を行った。状況説明がなされ、そして艦隊戦闘のさいの統一行動を高めるための方策が協議された。アメリカ重巡ヒューストンは後部砲塔が被弾して使えなくなっており、艦尾の砲撃力がなくなっているために陣形の後部に置くことができない。オランダ駆逐艦コルテノールは機関のひとつが故障したため速度が出ない。アメリカ駆逐艦ポーブは機関室の損傷のために出撃ができない。「そんな状況ではあるが、明るい報告をひとつご紹介できることは本官のよろこびである。」と前置きして、われわれの軍事行動が空からの護衛付きで行えるようになる可能性が高い、とドールマン提督が発言した。会議出席者の間でざわめきが起る。混じった笑い声の響きはシニカルだった。ぬかよろこびをいやというほど味わってきたひとびとがそこにいるのだ。明るい表情のままドールマン提督は続けた。「アメリカ空母ラングレーが攻撃機40機とパイロット30人を積んでオーストラリアからチラチャップに向かっている。それが絶好のタイミングでジャワに到着すること

月明のジャワ海に没す

をわれわれは期待している。」

しかし会議出席者の表情は変わらなかった。数が少なすぎるし、タイミングも遅すぎる。日本軍との決戦は明日明後日という差し迫った状況にあるというのに。

この作戦会議でドールマン提督は、各艦の取るべき動きを強く強調した。戦闘隊形の中で占めるべき位置、戦闘時の指揮に応じてどのような動きをするのか、寄せ集め艦隊の一番の弱点がそこにあり、それが戦闘の結果に直結していることを提督は十分知り抜いていたのである。

使える偵察機がほとんどない状況のために、艦隊の行動範囲はマドゥラ島からレンバンまでを索敵海域とし、敵艦隊の接近を待つ。そして敵艦隊を撃退したあとは西に向かい、ジャワ島西部で日本軍上陸部隊を撃滅し、首都バタビアの陥落を防ぐ。作戦要項文書が配布されて、作戦会議は解散した。

その時点で故障中だったポープを除いて、軍事行動が可能な全艦艇を集めた連合艦隊がマドゥラ島南部の泊地からスラバヤ海峡を通過してバウエアン島方面に向かったのは、それから間もない夜10時ごろ。明るい月が煌々と照らす南国の海を艦隊は進む。デロイテル・ジャワ・エクゼター・ヒューストン・パースの巡洋艦5隻とコルテノール・ヴィテデヴィット・エレクトラ・エンカウンター・ジュピター・エドワーズ・ジョーンズ・フォード・アルデンの駆逐艦9隻から成る堂々の隊列だ。

ところが、バウエアン島海域に到着したものの、敵艦隊の姿はどこにもない。ドールマン提督はしかたなく索敵海域のパトロールに移った。翌一昼夜を費やしたあとの27日昼前、艦隊は日本軍機の空襲を受けたが被害はなかった。

ところで、アメリカ空母ラングレーは会議出席者のほとんどが予想したように、ジャワ島戦線にやってくることがなかった。1920年にアメリカ海軍最初の航空母艦に改装されてラングレーと命名されたこの艦は、ヘルフリッチ総司令官が要請した航空戦力増強のためにP-40を32機積んで2月22日、オーストラリアのフリマントルを出港した。目的地はチラチャップである。

27日早朝、ラングレーは護衛のためのアメリカ駆逐艦ホイップルおよびエドサルの出迎えを受けたが、バリ島西方368海里の海上でバリ島トゥバン飛行場に進出してきた高雄航空隊の一式陸攻9機編隊に発見されて攻撃を受け、一波二波は切り抜けたものの第三波の攻撃で被弾し、炎上大破した。

航行困難に陥ったラングレーは最終的に放棄が決断され、あと120キロ北上すればチラチャップに到達する場所で、ホイップルが砲弾と魚雷を撃ち込んでその巨体を海中に沈めた。

その27日は、両軍艦隊の雌雄を決する戦闘がジャワ海で展開された日である。

27日昼、ドールマン艦隊は一旦スラバヤ港に帰投することにした。駆逐艦の給油が必要であり、そして乗組員も一昼夜を超える勤務で疲れきっている。しかしヘルフリッチ総司令官は異を唱えた。「たとえ空襲があろうとも、貴官は東方へ進撃して索敵と攻撃に専心されたい」

ドールマン提督はそれに応酬した。「当方はサブディからレンバンにかけての一带を哨戒し、今は東方へ向かいつつある。索敵機の情報が十分にあれば、この作戦は成功するが、昨夜は何一つ情報がなかった。駆逐艦は給油を必要としている。」

午後3時ごろ、艦隊はスラバヤ港に接近した。駆逐艦が燃料補給の準備を始める。ちょうどそのとき、総司令部から通信が入った。日本艦隊がバウエアン島東海域に進出しているという連絡だ。ドールマン提督は即刻方向転換を命じた。

スラバヤ入港をとりやめて反転し、全艦が戦闘隊形を整えたとき、激しいスコールが艦隊を覆った。雨が上がったとき、海上は明るく澄んで遠望がきいた。おかげで東方の北側水平線上にある黒い線が見張り員の目に飛び込んできた。ほどなくそれが巡洋艦2隻と駆逐艦12隻の日本艦隊であることが明らかになり、連合艦隊は戦闘配置を下令すると戦闘速度に増速して突進した。時は午後4時過ぎ、場所はスラバヤの北西30マイル。

重巡那智と羽黒が連合艦隊の前に忽然と姿を現すと、2万8千ヤードの距離からすぐに8インチ砲20門の砲撃を繰り出した。標的はエクゼターとヒューストンに絞られている。ヒューストンは空襲の被害で8イン

月明のジャワ海に没す

子砲が6門しか使えなくなっており、しかも敵に対して不利な体勢になっていた。デロイテルも6インチ砲でその砲戦に加わる。この砲戦は弾着観測機を使っている日本側に圧倒的に有利に展開した。アメリカ・イギリス・オランダ三艦の連携攻撃にもどかしさを感じていたのは旗艦デロイテル上のドールマン提督ひとりではなかったにちがいない。エクゼターの指揮官もヒューストンの指揮官も同じ思いを抱いたのではあるまいか。

その海上での雷砲撃戦のさなかに、P-40戦闘機10機に支援されたA-24爆撃機3機が上空に出現して日本艦艇に爆弾を投下した。それは連合艦隊乗員を喜ばせる効果はあったが、戦果は何もなく、おまけにP-40が日本軍の弾着観測機を攻撃しようとしなかったことから、戦況にもたらされた影響は皆無だった。日本軍の弾着観測機が撃墜もしくは戦場から追い払われていれば、海上での雷砲撃戦の行方はまた違うものになっていたかもしれない。

ドールマン提督は艦隊の砲撃力を最大限に高めるべく、戦闘位置の変更をはかった。しかし連合艦隊巡洋艦部隊への日本軍の砲撃は的確だった。デロイテルにも8インチ徹甲弾が甲板を破って艦内に飛び込んできたが爆発は起こらなかった。それがドールマン提督の決意を促したようだ。かれは敵艦隊に向けての接近を命じた。

そのとき日本軍駆逐艦7隻が一斉に魚雷を発射してから煙幕を展張し避退したが、連合艦隊に被害は出なかった。ヒューストンにもジャワにも砲弾は当たっていたが、戦闘能力が弱まることもなく、巡洋艦5隻は砲撃戦を続けた。

17時ごろ、それまで決定打が出ないまま雷砲戦を続けていた両軍にとって戦局の分かれ目がついにやってきた。羽黒の8インチ砲弾がエクゼターの機関部を大破させたために、エクゼターの速度が大幅に低下したのである。エクゼターは戦線から離脱しようとして左に回頭し、南に艦首を向けた。南にはジャワ島の海岸線がある。

エクゼターの左回頭に後続のヒューストンも倣った。前方にいる二隻が同じように動いたのだから、ヒューストンの後ろにいたパースもそれに倣う。先頭のデロイテルは後続艦が戦線離脱をはかっているのに驚き、自分も南に変針して艦隊の陣形は大きく混乱した。その混乱のさなかに日本艦隊が放った魚雷の一本がコルテノールに命中し、竜骨が折れてまるで折りたたみかけのペンナイフのような形で沈没した。

連合艦隊が港に向けて逃走をはかると見た日本艦隊はその追撃に移る。連合艦隊側は煙幕を張って位置をくらまそうとし、しばらく雷砲撃戦がやんだ。ところが日本駆逐艦朝雲と峯雲の二隻が連合艦隊に向かって突撃してきた。それを見たエレクトラ・エンカウンター・ジュピター・ヴィテデヴィットの4隻が迎撃に移り、戦闘が再開される。その間にドールマン提督はエクゼターをはずして巡洋艦部隊の体勢を立て直し、デロイテル・パース・ヒューストン・ジャワの4隻をもって日本軍輸送船団に一撃を与えようと考え、一旦南に下がってから日本軍輸送船団を探す動きを開始した。

駆逐艦隊決戦ではエレクトラが軽巡神通の砲撃で航行不能に陥り、その反撃を受けた朝雲も航行不能に陥った。しかしエレクトラはその後戦闘力を完全に失い、日没と共に沈没した。夜の帳が戦闘を一旦休止状態にした。

ドールマン提督は戦闘能力の落ちたエクゼターにスラバヤへの帰投を命じ、その護衛としてヴィテデヴィットを付けた。

艦隊は日本軍輸送船団を求めて北に進路を取った。北東に向かい、その後北西に向かい、あてもなく探してみたものの、偶然の女神は微笑んでくれない。そんなとき、ドールマン艦隊は輸送船団でなく日本艦隊に遭遇したのだ。最初日本艦隊はそれを友軍と思った。連合艦隊はそこにいる日本艦隊の規模がよくつかめないため、攻撃を躊躇した。それが友軍でないことに気付いた日本側が照明弾を発した。連合艦隊側も照明弾を打ち上げ、巡洋艦部隊の斉射が続いたが、当たらない。

戦闘態勢に入るのが遅れた日本艦隊は利あらずとして離脱をはかり、駆逐艦隊が煙幕を張りつつ攻撃行動に移ったが、双方まったく戦果なしに最初の夜戦は終わった。

ドールマン提督は考えをあらため、沿岸を西に向かって進むことにした。日本軍が上陸作戦を敢行するならば、ジャワ島西部のどこかの海岸で出会うはずだ。しかしアメリカ駆逐艦エドワーズの艦長はその動きに反抗した。ドールマン艦隊司令官からアメリカ駆逐艦隊に対し、魚雷が撃ちつくされたらバタビアのタンジュン

月明のジャワ海に没す

プリウツ港で補給せよと命令されているが、砲弾のあるかぎりこれまで艦隊行動を共にしてきた。われわれは一旦スラバヤに戻って燃料と弾薬を補給する。ドールマン提督は静かに駆逐艦4隻を去らせた。「オランダ人の度胸は頭の中にたくさん詰まっているようだ。」というエドワーズ艦長の独白は言うまでもなく提督の耳に届いていない。

ところが提督の考えは裏目に出た。

駆逐艦2隻を従えた巡洋艦部隊はジャワ島の陸影を左に見ながら月明のジャワ海を西進していた。その先にオランダ軍がその日の午後に敷設したばかりの機雷原があることをドールマン提督は知らなかった。それを連絡するべき総司令部にさえ、その報告が届いていなかったのだ。隊列の最後尾にいたジュピターが突然爆発を起こして炎上し、数時間後に沈没した。潜水艦の魚雷攻撃を受けたと思ったドールマン提督は西進をやめて北に向かった。しばらく進んだところは昼間の海戦が行われた場所で、コルテノール乗員が重油の海を漂っているのが発見されたため、唯一残っていた駆逐艦エンカウンターが生存者を救出してスラバヤへ運んだ。こうして連合艦隊は駆逐艦の付かない巡洋艦部隊だけになってしまった。

一時間ほど北上した連合艦隊は、ついに日本艦隊と会敵した。かれらが出会ったのは、ふたたび羽黒と那智を主力とする第5戦隊だった。日本艦隊も陣形を北に向けて敵と平行に並び、砲戦を開始した。距離は1万1千ヤード。双方ともに砲弾が残り少なく、兵員も疲労の極にあったため、砲戦は緩慢な応酬になった。

散漫な砲撃戦が20分ほど続き、その間に両艦隊は距離を狭めてきた。そして羽黒が4本、那智が6本の魚雷を発射したとき、連合艦隊はそれを見落としてしまった。

デロイテルの艦尾で大爆発が起こり、艦体は大きく身震いした。艦尾の火災は小爆発を誘発させながら艦首へと広がっていく。後続のパスとヒューストンは突然速度の落ちたデロイテルとの衝突を回避したが艦隊行動は大きく混乱した。数分後に最後尾のジャワも大爆発を起こし、棒立ちになりながら急速に沈んで行った。



艦内の爆発が二度目三度目と続き、いまや命運尽きたデロイテルからパースとヒューストンに宛ててドールマン艦隊司令官からの指令が飛んだ。ヒューストンとパースは生存者にかまわずバタビアに避退せよ。それが最期の通信となった。ほどなくデロイテルも、カレル・ドールマン少将と344人の兵員を乗せたまま、月明のジャワ海に没した。(完)